

乳児期の「聞く力」とは —保育者の考える教育評価から考える—

○樟本千里 (岡山県立大学)
岩立京子 (東京学芸大学)

西坂小百合 (共立女子大学)

キーワード：乳児，聞く力，評価指標

問題と目的

幼児期の教育においては，遊びを通して総合的に学習が行われるため，学習内容が見えにくい状況がある。また，この時期の言葉の教育は，「聞くこと」よりも「話すこと」に力がそそがれており，「話すこと」の研究は多いが，「聞くこと」に関する知見は少ない。しかし，保育の現場では「話すこと」ができない子どもよりも「聞くこと」ができない子どもに注目が集まっている。岡山市保育協議会 (2013) の研究報告書では，保育者の振り返りの中から問題として浮かび上がってくるのは，コミュニケーション能力の中でも，“受信する力”であると報告している。言いかえれば，「聞く力」ということであろう。その中では，保育所保育指針の中から言葉を抜き出して，指標づくりを試みている。しかしながら，指針の中の文言は抽象的なものも多く，どのようなコンピテンスから構成されているかも定かではない。保育者が考える「聞く力」とはどのようなものなのだろうか。本研究では，①保育者自身が行う評価であること，②子どもの遊びを評価すること，③子どもの行動項目で指標が作成されていることから鑑み米国の DRDP (Desired Results Developmental Profile) 2010 の指標を用いて，保育者の考える「聞く力」について一考しようとするものである。なお本報告は乳児版の報告とする。

方 法

被験者 2014年度の〇市の保育研究会に参加した保育者16名

材料 DRDP (2010) Infant/Toddler を用いた。Infant/Toddler 版は生後～36か月児を対象とした指標である。内容は，自己と社会性の領域 (SSD) が13項目，言葉の領域 (LLD) が6項目，認知の領域 (COG) 11項目，運動と知覚の領域 (MPD) が4項目，健康領域 (HLTH) が1項目の，5領域35項目から構成されている。発達の水準は5段階から6段階の水準が設けられている。

手続き 調査に先立ち，子どもの「聞けない状況」のエピソード記録を6回提出してもらった。エピソード記録は，乳児期 (3歳未満児) と幼児期 (3歳以上) のグループに分かれて，子どもの姿や，自分が行った援助についての話し合いを行う材料とし，子どもの「聞く力」に対して共通のイメージを浮き彫りにする作業に約半年かけた。その後，DRDP (2010) の項目を示し，「聞く力」において必要だと思われる項目について①当てはまる，②当てはまらない，③どちらともいえないの3択を行

った。まず，個人での投票を行い，9票以上獲得した項目を「聞く力」として抽出した。その後，7票，もしくは8票の項目については，話し合いを経て再投票を行い抽出した。

結果と考察

保育者は「聞く力」について必要な能力は，自己と社会性，言葉，認知の3領域にまたがると判断した (Table 1)。SSD から7項目，LLD から5項目，COG から3項目である。保育者は「聞く力」を発側面からとらえていることが示された。今後は，子どもの「聞く力」の個人差を測定できるかについて検討していく予定である。

Table 1 3領域の指標のうち選択された項目

領域	項目
SSD1	他者との関係の中でのアイデンティティ
SSD2	能力の認識
SSD3	自己表現
SSD4	共感
SSD5	自己的な慰安 (励まし)
SSD6	自己調整のための他者への援助要請
SSD7	他者のサポートへ反応
SSD8	衝動 (欲求) 制御
SSD9	大人との対話
SSD10	なじみのある大人との関係
SSD11	仲間との対話
SSD12	なじみのある仲間との関係
SSD13	社会的な理解
LLD1	言語理解
LLD2	言語への反応
LLD3	欲求と感情のコミュニケーション
LLD4	相互的なコミュニケーション
LLD5	言葉に対する興味関心
LLD6	表象の認識
COG1	原因と結果
COG2	問題解決
COG3	模倣
COG4	記憶
COG5	象徴遊び
COG6	好奇心
COG7	注意の維持
COG8	日常的なケアを通じた出来事の順序の理解
COG9	数の理解
COG10	分類とマッチング
COG11	空間と大きさ

*色かけが選択された項目

本研究は JSPS 科研費26381069の助成を受けて行ったものである。